

日本データベース学会 Letters: 目的と意図

DBSJ Letters: Aim and Scope

増永 良文[△]

Yoshifumi MASUNAGA

1. 日本データベース学会の設立

データは 21 世紀最大の資源であるとは、本会維持会員の一社の最近のコピーであるが、まさしくそうである。小生は、自分の名刺に「地球丸ごとデータベース」という標語を考え、それを朱色で印刷して久しい。世界丸ごと、宇宙丸ごと、とも考えたが、「丸ごと」という言葉と合うのは「地球」でしようと考えて、現在の標語にした。

これから将来、日本データベース学会は滅びても、地球が滅びても、膨大に蓄積されたデータは滅亡しない。我々には、そのデータを収集し、組織化し、管理し、様々なユーザに提供・提示する義務がある。その重責を担うために日本データベース学会 (Database Society of Japan, DBSJ) は設立された。設立は、平成 14 年 5 月 21 日である。

現在、日本には(社)情報処理学会データベースシステム研究会(以下、DBS 研)、(社)電子情報通信学会データ工学研究会(以下、DE 研)、そして米国 ACM (Association for Computing Machinery)のデータベース研究会 SIGMOD (Special Interest Group on Management of Data)の日本支部である ACM SIGMOD Japan Chapter (以下、SIGMOD-J) という 3 つのデータベース学会活動がある。DBS 研、DE 研、SIGMOD-J はお互いに連携を図りつつも、それぞれ工夫をこらして独自の研究会活動を行っており、DBS 研と DE 研が毎年夏に合同で開催している「夏のデータベースワークショップ」、DBS 研が毎年暮れに開催している「DBWeb」シンポジウム、DE 研が毎年春に開催している「DEWS」ワークショップ、そして SIGMOD-J が適宜開催している「大会」には毎回多数の者が参加している。また、DBS 研が情報処理学会情報学基礎研究会(FI 研)と共同編集で発行している「情報処理学会論文誌：データベース」は刊行 4 年目を迎え(平成 15 年度からは DE 研も共同編集に加わる予定)、さらに、平成 15 年度

以降の科学研究費補助金申請の総合領域の分科情報学の細目に「メディア情報学・データベース」が立ち上がり、近年の我が国の学界におけるデータベース研究活動は興隆している。一方、産業界ではデータベース抜きの情報システムの構築は考えられず、近年はデータマイニングなど高度なデータベース応用も企業活動に必須となっている。

しかしながら、我が国にはこのように高まっているデータベース活動を代表する学会がこれまでなかった。したがって、データベースコミュニティは情報科学・工学分野で多大な影響力のある活動を行っているのに、そのビジビリティに欠け、またその活動の実績を我が国の学術の発展に結び付けてゆく直接の手段を有していないなどの問題点があった。本会の設立は、まさしくこのような問題点を解決して、さらに上記 3 学会活動と密に連携しあい、我が国のデータベース研究・開発活動をどこまで掘り下げ、またその裾野をどこまで広げることができるか、への挑戦と位置づけることもできる。図 1 は、本会が既存の 3 学会活動とどのように関連するかを直感的に示すものである。

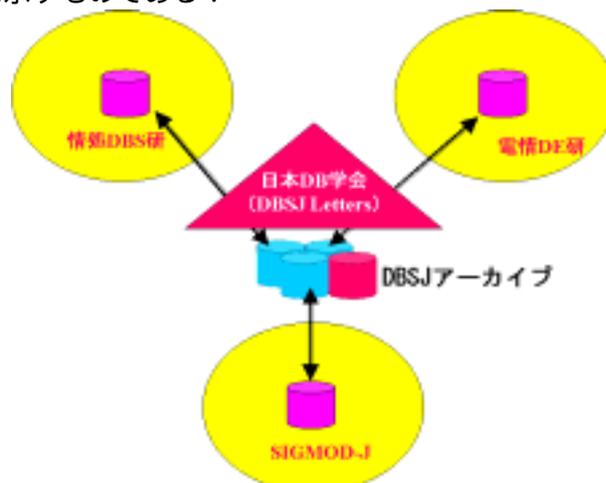


図 1 日本データベース学会と既存の 3 学会活動との関係

2. DBSJ Letters の刊行

さて、日本データベース学会が、既存の 3 学会活動に屋上屋を重ねるものではなく、真に我が国のデータベース研究・開発活動に資するものであることを実証するには、皆が納得する活動を展開していく必要がある。その柱が、本会固有の論文誌を刊行することである。ただ、我々日本のデータベースコミュニティには、歴代の DBS 研主査が奮闘して、情報処理学会を動かし、新たに「情報処理学会論文誌：データベース」(以下、TOD)の発刊に漕ぎつけ、それを過去 4 年にわたり育ててきた経緯がある。したがって、本会固有の論文誌の刊行は TOD と抵触

[△] 正会員 お茶の水女子大学理学部情報科学科
masunaga@is.ocha.ac.jp

するものであってはならない。

そこで、我々データベース人は知恵を出し合い、TOD と競合するものではなく、むしろそれを補い、我が国のデータベース研究活動を一層興隆させるメディアとして、「日本データベース学会 Letters」(以下、DBSJ Letters あるいは Letters) を刊行することとした。TOD と DBSJ Letters の編集方針の違いをレーダチャートで図 2 に示す。

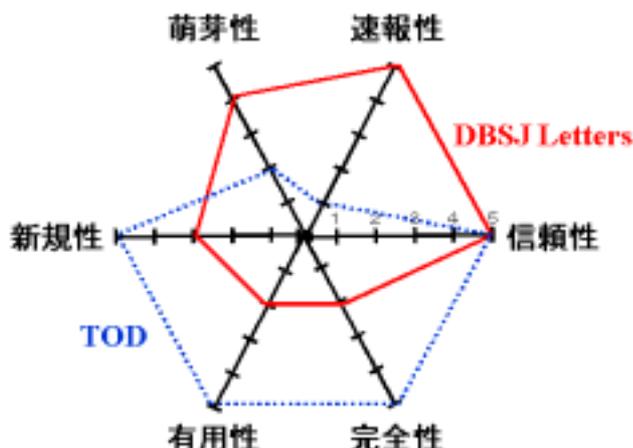


図 2 TOD と比較した DBSJ Letters の編集方針

ここで意図していることを端的に述べると次のようである。Letters は分野的にはデータベースに係るあらゆる論文を掲載する。ただ、図 2 に示したように、従来の論文誌の価値観に拘泥するものではない。Letters に掲載される論文は完全性を求めない。ここに完全性とは、これはグローバルスタンダード化されてしまった感のある、論文は、モデルの提起に始まり、システムの実装、評価、といった一連の項目が満たされないとその価値がないとすることをする。また、何の役に立つのか、mission critical なアプリケーションは何か、などと目くじらを立てないということである。したがって、Letters の論文はアイデアだけでも良い。モデルの提起だけでも良い。したがって、萌芽性を重視する。かつて、CACM (Communications of the ACM) に掲載された Edger F. Codd の論文 “A Relational Model of Data for Large Shared Data Banks” は、データモデルだけの提案であり、システムの実装、いわんや評価は一切ない論文であった。CACM はそれを採録する先見の明があったということあり、それがなかったら今のリレーショナルデータベース時代は到来していなかっただろう。

今、自分たちの研究室の、あるいは研究グループの最前線でこんなことが起こっています、ということ即刻 Letters に投稿していただきたい。Letters はそれに誠意をもって応えていく編集方針で臨んでいく。

3. 創刊号の刊行

創刊号は、本年 7 月に鬼怒川温泉で開催された DBS 研と DE 研が合同開催した「夏のデータベースワークショップ」で発表された 73 件の発表から、座長推薦で 18 件を収録することで刊行できた。関係諸氏に感謝したい。

具体的に推薦から Letters 刊行にいたる流れは次のとおりである。まず、推薦に当たっては、座長に図 2 で示した Letters の目的と意図を理解していただいた。73 件の発表から 19 件の座長推薦があった。つぎに、推薦された発表を行った発表者に Letters 編集委員会から Letters への投稿依頼を出した。その際、Letters の編集方針と投稿規程を添えて、目的と意図を著者に伝えた。その結果、18 件の論文投稿となった。編集委員会ではそれらを閲読し、修正すべき点を修正していただき、18 件の採録となった。それらを、本創刊号は収録している。

4. 今後の展開

Letters は本会の貴重な財産である。Letters は 2 つのメディアを用いて刊行される。ひとつは電子出版であり、それは DBSJ アーカイブに保管されて、フルアクセス権を有する本会会員の閲覧に供される。もうひとつは、ハードコピー版である。これは専ら著者用を念頭においているが、頒布もする。両媒体とも ISSN を取得している。

Letters は年 4 回刊行する。DBS 研、DE 研、SIGMOD-J、そして本会が開催する様々な研究会、ワークショップ、シンポジウム、大会などから座長推薦システムで論文を募る一方、上記 Letters の目的と意図に合った論文投稿を広く一般からも求めて掲載して、我が国のデータベース研究における新しい価値の確立に資することができれば、刊行の目的と意図を達成できたことになる。

会員諸氏の深いご理解とご協力をお願いして、巻頭の辞としたい。

増永 良文 Yoshifumi MASUNAGA

お茶の水女子大学理学部情報科学科教授。1970 東北大学大学院工学研究科博士課程修了、工学博士。データベースシステムの研究・開発に従事。情報処理学会データベースシステム研究会主査、情報処理学会コンピュータサイエンス領域委員長、情報処理学会監事、ACM SIGMOD 日本支部長、などを歴任。情報処理学会フェロー。電子情報通信学会フェロー。現在、日本データベース学会副会長。著書に「リレーショナルデータベース入門」(サイエンス社)、「リレーショナルデータベースの基礎 データモデル編」(オーム社)など。